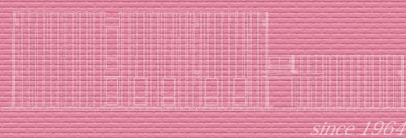


# 資料館だより



展示室2の展示風景

## 世田谷区立郷土資料館の再開館を迎えて

世田谷区立郷土資料館は、世田谷区制30周年記念事業の一環として建設し、昭和39年9月10日に現在の本館で開館しました。その後、収蔵資料の増加に伴い、保管場所が手狭になったことなどから、建物を増築して、昭和62年に新館を開設して現在に至っています。

開館後、本館は60年近く、新館についても35年が経過し、設備の老朽化が顕著になってきたことから、郷土資料館の安定的な運営を確保するために、電気設備や機械設備の更新を主とする大規模な改修工事を実施したところでした。改修工事に伴い、令和4年4月1日から令和5年7月末日までの長期にわたる休館期間中は、施設利用の皆様にご不便をおかけいたしました。

このたび、皆様のご理解とご協力をいただく中で設備更新工事を竣工させ、常設展示もリニューアルを図って、令和5年8月1日から再開館することになりました。本号では、更新された郷土資料館の概要と常設展示のリニューアルについてご案内いたします。

まず、更新された設備のうち、機械設備についてのご案内です。

機械設備では、館内の空調設備をはじめ、消火設備、給水設備、排水設備を大幅に更新しました。

空調設備の更新では、冬場の暖房空調を行う際の加湿機能を新設して、乾燥による資料の劣化を抑制するとともに、来館される方々に、より快適な環境でご利用いただけるようにしています。また、給水設備では、給水管の直結化によって貯水槽を不要としたことにより、維持管理費の低減化を図っています。

電気設備では、館内の照明を全面的にLED化して維持管理コストを低くするとともに、電話交換機設備を更新しました。また、新館1階の集会室では、映像音響設備を更新しています。

郷土資料館の敷地では、毎日湧水が相当量出ているため、排水ポンプで排水処理し、その水は、お隣の世田谷代官屋敷の消防用水利の一部としても活用されているところですが、落雷などの停電時にも排水対応が

できるように、新たに自家発電設備を設けて非常時の備えを強化しています。

機械設備や電気設備以外の整備としては、屋上の防水処理を施して、漏水による水災害被害リスクを軽減しています。また、トイレの改修工事を実施して、暖房便座をすべてのト



新設の多目的トイレ

イレに備えるとともに、洗面所の自動水栓化を行っています。さらに、車いす利用者の方も利用できる多目的トイレを新設しており、オストメイト設備をはじめ、ベビーチェアやベビーベッドなども備えています。

一方、博物館としての主たる設備の一つである本館と新館の2階の壁面展示ケースは、内装改修および照



調光・調色機能を充実させた展示ケース

明LED化により、空気中の有害物質や光による展示資料の劣化を抑制することで、展示環境の改善を図りました。また、展示ケース内の調光・調色機能を新たに設けて、展示における演出をより多彩にすることが可能となりました。さらに、本館入口を入ってすぐのロビーの壁面は、マグネットで掲示物を貼れる仕様にして、来館された方々への案内の利便性を高めています。

このたびの改修工事では、建物構造などの改修は、一部にとどまっていることから、建物の内装や外装をはじめとして更新できていないところが多々ありますが、それらの更新については、今後の課題としています。

次に、常設展示のリニューアルについて、ご紹介いたします。常設展示をリニューアルするにあたっては、来館者の方々に一層わかりやすい展示、特に、「世田谷

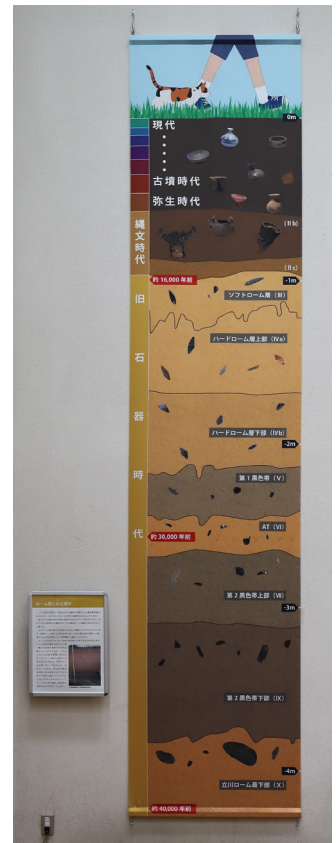


本館ロビー

区の将来を担う世代が世田谷の歴史と文化への理解ができるように工夫を凝らす」ことを念頭に置いて取り組んでいます。子ども向け解説パネルの整備や自ら手に取って学ぶことができる体験コーナーを新たに設けています。

そのほか、衣食住や生業、信仰、年中行事などの民俗分野を取り上げる展示コーナーや、世田谷にゆかりのある美術品を紹介する美術のコーナーを新たに設けました。また、本館1階の吹き抜けとなっている「展示室1」の壁面には、石器、土器などの土の中の遺物を時代とともに理解しやすく模式化した高さ約4.8mの土層柱状図を設置しています。

世田谷区では、区内の文化財や関連資料をデジタルアーカイブ化して、気軽に文化財を知ることができる「世田谷デジタルミュージアム」を公開していますが、ぜひ、郷



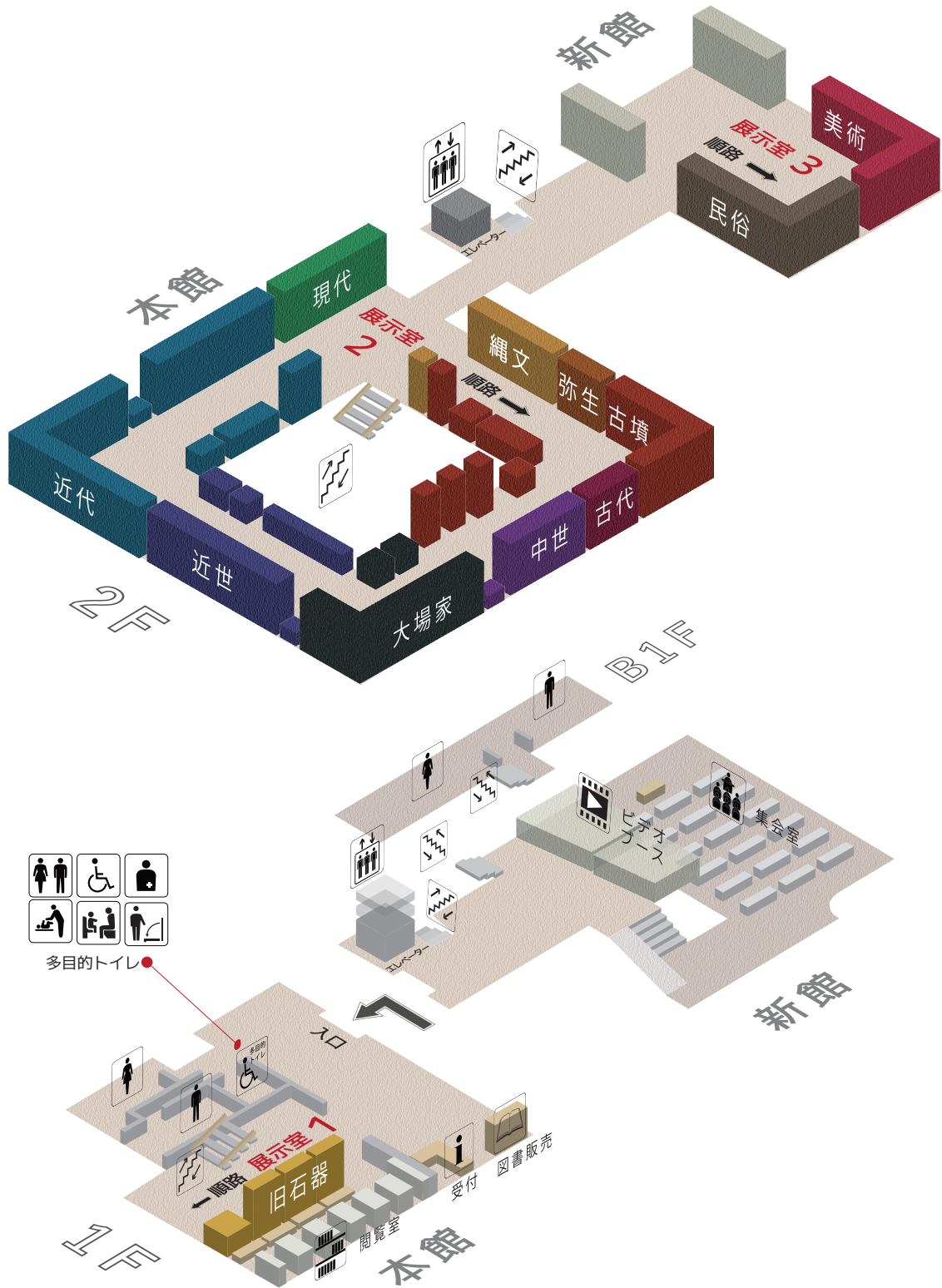
展示室1の土層柱状図

たどき、実物展示を目で見て肌で感じ、一層世田谷の文化財に親しんでいただきたいと思います。

常設展示をリニューアルした当館を訪れた方が、新たな発見をして世田谷に一層愛着を持っていただければ幸いです。皆様の来館を職員一同、心よりお待ちしております。

(館長 桐山孝義)

# 館内案内図



# 最終氷期に生きたせたがやの人々

後期旧石器時代 約 38,000 ～ 16,000 年前

現在よりも寒冷な気候のもと、後期旧石器時代の人々は、動物の狩猟や植物採集を主な生業として季節ごとに移動をしながら生活していました。

旧石器時代の遺物は2～3mも堆積した立川ローム層の中から見つかります。最も古い時期には大型の打製石斧や局部磨製石斧きよくがませいせきふが使用され、その後ナイフ形石器が主体の時期が長く続きます。そして、槍先形尖頭器やりさきがたせんとうきが作られるようになり、細石刃さいせきじんが出現します。本展示では、世田谷区内から発見されたこれらの石器を時期ごとに展示しています。

また、今回新たに展示室吹き抜けの壁面に、立川ロームの土層断面と、各層位から出土した石器を配置した模式図の作成を試みました。模式図の中の石器は、すべて区内から出土した石器で、今回展示してあるものも多く含まれているので探してみてください。土層断面図は原寸大、石器は見やすいように任意で拡大してあります。



## 打製石斧と局部磨製石斧

世田谷区内で見つかった石器の中でも最も古く、瀬田遺跡で出土した大型の打製石斧は、長さ22cm、重さ1.87kgもある。



## ナイフ形石器

旧石器時代を代表する石の道具で、いろいろな形がある。木や骨などの柄に装着して使われた。



## 遠隔地から運ばれてきた黒曜石

瀬田遺跡に、長野県の諏訪・和田（中部高地）から運ばれてきた。



## 礫群

旧石器時代の調理の跡と考えられ、拳大の川原石が赤く焼け焦げている。

# 土器の登場とムラのくらし

縄文時代 約 16,000 ～ 2,500 年前

寒い時代が終わり、暖かく安定した気候に移り変わると、縄文時代の人々はこの変化にうまく適応し、ムラを営み定住します。そして旧石器時代には使用されなかった「調理（煮炊）」・「貯蔵」・「食事」・「運搬」等のための土の器、いわゆる「縄文土器」が登場します。なかでも、縄目文様がついた特徴的な模様「縄文」は時代を冠する名称となっています。

本展示では、区指定文化財となっている土器を中心に、各時代の特徴的な土器を展示し、形や文様・装飾の美しさに着目しながら、縄文時代の世田谷の移り変わりを楽しんでいただければと思います。また、縄文時代前期の土坑から検出された貝層の剥ぎ取り標本も展示しています。むかしの人々の食生活の一部が垣間見える貴重な資料です。ぜひ縄文時代の人々の生活を想像してみてください。



## 根津山遺跡の土器と石器

世田谷における最古級の土器（土器の表面に粘土紐を貼り付けた隆起線文が特徴）と草創期から使用され始めた有舌尖頭器。



## 稲荷丸北遺跡の土器

前期の土器で、早期の尖底状から平底状に変化している。また、鉢型もこの時期に登場する。



## 桜木遺跡の土器 区指定文化財

縄文時代最盛期である中期に使用された土器で、華やかで立体的な装飾が施されている。



## 注口土器

後・晩期には、液体を注ぐための注口土器が多く出土している。

# 稲作の開始・ムラからクニへ

弥生時代 約 2,500 ~ 1,750 年前

水田稲作が朝鮮半島から九州北部に伝わり、徐々に日本列島各地に広まりました。稲作が伝わり、しばらくして大陸由来の金属器などの様々なモノや技術が伝来しました。世田谷のある南関東地方に稲作が伝わったのは、中期の紀元前3世紀頃です。

ここで、遺跡から最も多く出土する土器に目を向けてみると、南関東地方では、中期の終わり頃には広い範囲で宮ノ台式土器が使用されていましたが、後期になると、地域ごとに特徴的な土器のまとまりが見られるようになります。そして、世田谷区の位置する地域には、3つの特徴的な土器グループが分布していました。

本展示では、区内でも代表的な遺跡である喜多見陣屋遺跡と堂ヶ谷戸遺跡から出土した、弥生時代後期の土器を中心に展示しました。遺跡ごとに見られる土器の組み合わせの違いを観察してみてください。



## ■ 殿山遺跡の土器

宮ノ台式かめの甕形土器。弥生時代の中期後半、宮ノ台式の土器は南関東地方一帯で広く使われていた。



## ■ 騎兵山遺跡の環濠集落

後期になると濠に囲まれた集落が、低地を望む高台の上に現れる。



## ■ 喜多見陣屋遺跡の土器

くがはらくがはら式土器、あさひこうじあさひこうじ式土器、中部高地系の土器が後期前半の同じ竪穴建物跡（9号住居址）から出土している。



## ■ 堂ヶ谷戸遺跡の土器

後期後半、在地の土器とともに埼玉県北西部を中心に分布するよしがやよしがや式土器が出土している。

弥生時代担当：前田知寿

# 首長の台頭と大型墓の造営

古墳時代 西暦 250 年～ 700 年頃

古墳時代は全国的に大陸との関係が密接になり、新しい技術や製品を得てムラが拡大していくとともに、ムラをまとめる有力者の墓として古墳や横穴墓が築造される時代です。世田谷では多摩川流域の国分寺崖線上と目黒川流域に、集落跡と古墳・横穴墓が多く分布します。

本展示では初・前・中・後・終末期、各時期の集落住居址からの一括出土品を中心に展示し、土器セットの変遷が見られるようにしました。また、中期を代表する野毛大塚古墳や、後期古墳、横穴墓から出土した埴輪・副葬品を展示しています。ムラとハカの変化と関わりを見渡してみてください。



## ■ 瀬田遺跡の土器 区指定文化財

ムラを囲む環濠に、前期の土器が一括で廃棄されている。多くの器種を含み、ほとんどが在来系だが、搬入品や模倣品も含まれる。



## ■ 下野田遺跡の土器

中期になると、これまでの野焼き系統の土器とは異なり、窯を用いて高温焼成した須恵器が登場する。



## ■ 上神明遺跡の土器

後期には、カマドに常設するために甕が長胴化し、また蒸し器としての甗こしきが日常的に使われるようになる。



## ■ 等々力溪谷横穴墓群の副葬品

3基の終末期横穴墓に副葬された土器。静岡県湖西窯産の須恵器や、暗文が施された土師器はじきつき坏など、遠方で作られたものも副葬された。

# 武蔵国のなかのせたがや

古代 奈良・平安時代 710年～1185年

古代とは奈良・平安時代を指しますが、この時期の世田谷は、文献などの文字情報が乏しいこともあり、不明なことだらけです。そもそも「せたがや」という地名すらまだ登場していません。そうした中であって、展示における頼みの綱は、必然的に考古資料、すなわち発掘品ということになります。発掘成果をもとに見ていくと、現況、多摩川流域にこの時期の大規模な集落跡が確認できます。そこで、興味深い遺物が出土している喜多見と瀬田に力点を置き、律令体制下の世田谷の様相を浮かび上がらせることを展示のポイントの一つとしています。いま一つは、日本人の生活や文化に大きな影響を及ぼした仏教にスポットを当てています。特に、この時期「寺」が存在していた可能性、そして、「死」という観点から、区内での検出が多い火葬墓をピックアップしています。



## ■ 墨書土器

奈良時代に入ると、墨で文字などを記した須恵器や土師器が出現する。器の内面や外面、底部に記され、一文字のみの場合が多い。文字は使用される場所や器の性格を示すようだが、呪術的な性格を持つものもある。



## ■ 鍔帯金具・刀子・砥石

瀬田遺跡の住居跡から出土したもの。これらは主に官人が身に付けていたもので、「鍔」は腰帯（ベルト）の飾り金具。刀子は木簡や竹簡を削るための小刀。砥石は刀子を研ぐための滑石である。



## ■ 柱状高台土師質土器片

意外に重要な意味を持つ破片。今のところ武蔵国内では国府や秩父平氏の居館周辺でしか出土しない特殊な土器とされていることから、木田見氏関連の遺物とみられる。つまり、木田見氏の喜多見居住が平安時代に遡る可能性を示唆しているのである。



## ■ 骨蔵器

火葬骨を納める器（骨蔵器）は、専ら日用品が使用された。諏訪山遺跡（奥沢3丁目）出土の骨蔵器は、底部が窄まった無花果形の土師器甕。平安時代前期に南武蔵地域（東京・神奈川）で多用された。骨蔵器は、火葬墓造営時期判定の有力な物証となる。



# 有力武家の出現と領地支配の様子

中世 鎌倉～安土桃山時代 1200年代前半～1590年

中世は鎌倉時代から安土桃山時代までで、この時期になると文献上の記述や文書資料も増え、世田谷在住の有力な武家が存在していたことが確認できます。とりわけ重要なのが、鎌倉時代の幕府御家人・木田見氏と、南北朝から安土桃山時代にかけての鎌倉公方御一家・吉良氏です。そして、中世も末になると小田原北条氏の勢力が深く浸透してきます。こうした世田谷にゆかりある武家の動向にスポットを当てたのが、この時期の展示の特徴です。また、区内で発掘事例の多い中世特有の石造物である板碑を露出展示としたのも、リニューアルによる変化の一つです。間近で、独特の形状や刻まれている文字文様など、造形の美しさを堪能してください。



## ■ 喜多見陣屋の青磁・白磁片

中国製の高級磁器は庶民の手にとどかないもの。<sup>かんが</sup>官衙や寺院、地域支配者と結びつく品であり、出土場所から見て木田見氏関連の遺物に間違いない。小片だが貴重な品々である。

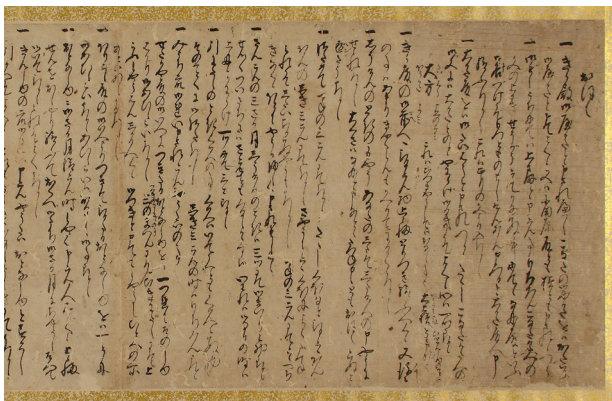


## ■ 世田谷城跡の土師質土器

ロクロ成形の器で15世紀後半から16世紀後半のものが複数見つかった。このうち「雲関」の墨書銘がある器は、世田谷城内にあったとみられる豪徳寺の前身・弘徳院に関わる遺物と思われる。



(裏面)



## ■ ほうじょうげんあん 北条幻庵覚書(部分) 区指定文化財

中世、東国屈指の名門武家であった吉良氏へ嫁ぐ北条氏康の娘(鶴松院)に対して、氏康の弟・幻庵(北条宗哲)が、嫁としての心得など24カ条を書き与えたもの。平易な仮名書き文を用いている。

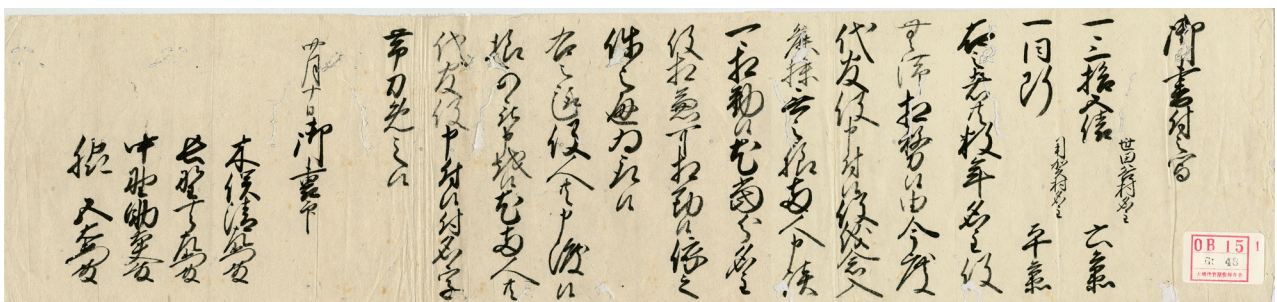
中世担当：鈴木 泉

# 世田谷代官大場家の歴史

中世～近世

江戸時代、現在の世田谷区域の半分程度は彦根藩井伊家の領地で、彦根藩世田谷領と呼ばれていました。世田谷領の代官を務めたのが、世田谷吉良氏の有力家臣だった大場家でした。大場家の家祖とされる大場越後守信久は、「吉良四天王」の一人に数えられ、元宿（現在の世田谷区役所辺り）に住んでいました。その後、天正6年（1578）に世田谷新宿（現上町）でボロ市の起源とされる楽市が開催されることになると、その管理を任せられ、現在世田谷代官屋敷の建物が残るこの地に移ってきたと伝えられています。

当館では、以前から大場家に関する資料展示を行っていましたが、特別展会期中などは観覧することができませんでした。リニューアル後は、代官屋敷を見学に来た人が、いつでも大場家や代官屋敷の歴史について理解を深めることができるようになりました。



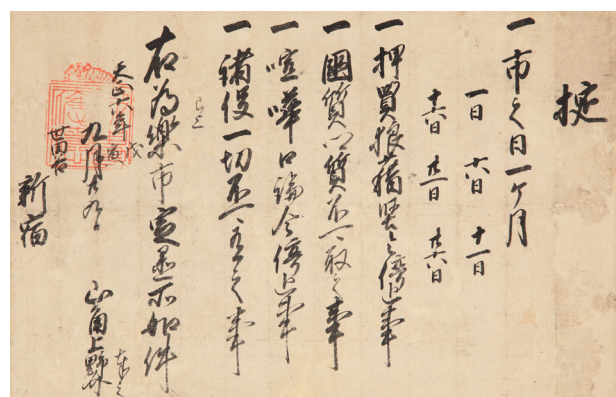
## 大場六兵衛・飯田平兵衛代官役申付御書付写

元文4年（1739）、世田谷村名主の大場六兵衛と用賀村名主の飯田平兵衛が世田谷代官に命じられた際の書付。代官の役料は米35俵で名字帯刀を許された。



## 二十か村絵図（部分）

彦根藩世田谷領20か村を描いた絵図。世田谷領以外の村は村名が記されるだけだが、領内については家や道、寺院の伽藍配置まで細かく描かれている。



## 楽市掟書

楽市は、月に6日間開かれる六斎市だった。その後、江戸時代には年に一度開かれる歳の市となったが、明治時代後半から、現在のように12月15、16日と1月の15、16日に開催されるようになった。

大場家担当：角和裕子（学芸員）

# 江戸近郊農村の姿

近世 1590年～1867年

江戸時代の世田谷には40余りの村がありました。この内、半分程度を彦根藩領という大名領が占めていたことが世田谷の特徴です。世田谷の村々は、江戸日本橋からおよそ10～20km圏内に位置する都市近郊農村でした。人々は、茄子や芋、大根などの野菜を作り、江戸へ出荷し、その帰りには武家屋敷や町屋で糞尿を汲み取り、肥料（下肥）としました。

江戸時代の展示は、和紙に墨で文字が記された「古文書」が多くなる傾向があります。古文書は当時のことを伝えてくれる貴重な歴史資料ですが、いわゆる「くずし字」を読めない人にとっては理解が難しい展示品でもあります。今回の展示では、絵図や当時実際に使われていた道具などを積極的に取り入れることで、古文書に記された内容が理解しやすくなるよう工夫しました。



## 御用留

幕府や領主からの触書や通知を書き留めた帳簿。江戸時代には、領主支配に関わる大量の文書が各村で作成されるようになった。



## 水車万力<sup>まんりき</sup>

世田谷では、18世紀後半～19世紀以降、水車を利用した製粉・精米が広く行われるようになった。この水車万力（歯車）は、荏原郡最大と言われた野沢水車のもので、明治時代の記録によれば水輪は8メートルほどあった。



## 江戸名所図会「九品仏浄真寺」

江戸の近郊に位置する世田谷は、江戸に住む人々にとって日帰りや一泊二日程度の旅が楽しめ手軽な行楽地だった。19世紀に刊行された『江戸名所図会』には区内の寺社や旧跡が複数紹介されている。

近世担当：角和裕子

# 村から町へ

近代 幕末～昭和 1853年～1945年

19世紀半ばの開国後、安政の大獄や桜田門外の変など、幕末の混乱を経て発足した明治新政府は、中央集権国家の成立を目指しました。廃藩置県によって全国支配を一元化し、地租改正や学制の公布など、急速に近代化政策を押し進めていきました。それは、江戸の近郊農村だった世田谷にも様々な変化をもたらしました。軍隊の移転、鉄道の開通と電灯・電力の普及、人口増に伴う農業の形の変化や宅地化への転換など、東京都市圏の拡大により村は町へと変貌し、昭和7年（1932）には世田谷区が成立しました。同じ頃、アジア侵略を進めていた日本は国際社会からの孤立を深め、やがて太平洋戦争へと突入していきます。

本展示では、近代のスペースを広げ、さらに展示ケース内の壁面や通路を活用して、今まで公開していなかった資料を多数展開することで、展示の一層の充実を図りました。



## 桜田門外の変絵巻（部分）

安政7年（1860）3月3日の桜田門外の変を描いた作品。本資料は、直弼襲撃に加わった蓮田市五郎が、事件後、熊本藩細川家にお預けとなっている間に描いたものの写し。



## 荏原小学校沿革誌 明治22年 区指定文化財

明治7年、旧太子堂郷学所が荏原学校と名を変え世田谷最初の公立小学校として誕生した。その歴史を、初代校長の宮野芟平が綴ったもの。



## 玉電模型

玉電は、世田谷で最初に敷設された鉄道で、明治40年（1907）に渋谷―玉川間を結んだ。当初は多摩川からの砂利運搬が目的で、ジャリ電とも呼ばれた。これは、開業時製造の木造単車3号の模型。



## 北沢二丁目子供奉仕隊隊旗と日誌

昭和15年（1940）結成の北沢二丁目子供奉仕隊。隊旗を、当時、同町内に住んでいた東條英機が書いている。

近代担当：角和裕子・小林信夫（歴史専門調査員）・上原 智（同）

# うつり変わる暮らし

現代 1945年～

現代の展示は、第二次世界大戦後から高度経済成長期までの約40年を扱い、従来よりも展示スペースを大幅に増やしました。その理由の一つに、小学校の社会科見学が挙げられます。

郷土資料館では年間約30校の見学を受け入れており、学習内容として、電気・水道・ガスが整備される前の暮らしの道具や世田谷の様子うつり変わりについても触れてほしいという要望が増加しています。当館職員による解説とは別に、常設展示の見学でも実物を見ながらかつての生活を学べるように、暮らしの道具を中心に配置しました。

特に、第二次世界大戦後の物資・食糧不足の時代から、電化製品が一般家庭に普及した高度経済成長期は、人々の生活様式が大きく変化した時期であり、時代の変化を感じとっていただきたいと思います。



## ■ パン焼き器

物資不足のため、戦闘機の素材であったジュラルミンを利用して製造されたパン焼き器。米不足のため、比較的安くて入手しやすい小麦やコーンスターチを原料に、代用食としてパンが作られた。



## ■ 電気釜

昭和30年（1955）に初めて販売された電気釜は、炊飯後電気が切れ、保温機能はなかった。その5年後に販売されたこの電気釜は、自動的に保温に切り替わり3～4時間程度保温できた。



## ■ 扇風機

黒い扇風機が一般的だったが、第二次世界大戦後にプラスチックの導入により、カラー化され、涼しげな若葉色などが採用された。また、羽根を覆うガードのデザインをはじめ、扇風機の様式にも様々な変化をもたらした。



## ■ テレビ

昭和28年（1953）2月1日、日本ではNHKが初めてテレビ放送を開始した。このテレビ受像機は、オランダPHILIPS社製のテーブルタイプで、同型は100台輸入されたといわれている。

現代担当：松浦瑛士（学芸員）・松本知佳（学芸研究員）

# 受け継がれる形

## 民俗

今回、常設展示に民俗分野を新設しました。民俗とは、人々が生活の中において生み出し、継承してきた、衣食住や慣習、生業、信仰、年中行事及びこれらに用いられる衣服、道具など、生活の変化を示すものです。

本展示では、テーマを2つ取り上げました。1つ目は、ムラの中で結成された講中という集団の相互扶助や信仰についてです。講中の行事で使用される道具や社寺からもらってきたお札、古文書を中心に展示しています。資料からは日常生活における人々の関わりや、信仰に込められた「願い」が読み取れます。

2つ目は、近年注目され、「せたがやそだち」の源流ともいえる世田谷の野菜について紹介します。第二次世界大戦以降、宅地化が進むなか、農家による品種改良が行われ、名産品となった野菜がいくつもあります。その代表例が大蔵大根です。

※特別展会期中など、見学いただけない時期もあります。



### 札額

神社やお寺でもらってきたお札は、地域のどんど焼きで、お焚き上げされることが多い。しかし、額にお札を貼る慣習をもつ家がまれにある。等々力のある家では、毎年大晦日に家の当主がその年にもらってきたお札を額に貼っていた。



### 大蔵大根レプリカ

大蔵の石井泰次郎が、練馬秋づまり大根と在来種を自然交配させ、さらに耐病性のあるものを選抜育成し生み出した。その形は、円筒形で尻（先端）が丸くつまっているところが特徴である。また、肉質は柔軟で繊維が少なく、型崩れしにくく、甘みがあるため、煮大根に最適とされている。



### ヘラ・ノミ

目黒の筍を普及させた山路治郎兵衛勝孝が考案したもの。筍掘りの道具は主に目黒の鍛冶屋と、世田谷では駒沢付近でも製作されたようだ。

ヘラはシャベルのような形状で土を掘るだけでなく、先端にある刃で根を切ることもできた。ノミは「ツキ」とも呼ばれ、深い地中に根がある場合や、根に挟まれている筍を収穫する際に使用された。

民俗担当：松浦瑛士

# 世田谷の文芸

## 美術

このコーナーでは、世田谷にゆかりある画家や文人らの作品・史料、また、区内の旧家や社寺に伝えられていた文芸分野の作品などを展示しています。時代的には、近世（江戸時代）から現代までですが、力点は江戸時代に置いています。彦根藩に関わる画家や書家、世田谷で生まれ育った文才や画才に秀でた者達など、今日ではあまり知られていませんが、当時は名の知られた者達が少なくありません。展示作品・史料を通じて、ぜひ彼らの存在にもここをとめていただければ幸いです。そして、近現代にも裾野を広げ、多くの作品・史料や人物を紹介していくつもりです。なお、展示スペースは新館2階の展示室3（旧企画展示室）となるため、特別展や季節展などが開催されている期間は見学できないことをご了承ください。また、基本的に原本資料の展示となるため、年に数回の展示替えを予定していますので、展示期間等は事前にホームページなどで確認の上ご来館ください。



### ■ 本草図譜

代田村名主・齋田雲岱さいとうんたいが描いた写生図譜。江戸で著名だった大岡おおおか雲峰うんぽうに師事して画家としての腕を磨いた雲岱は、写生をもとにした細密描写に秀で、主に動植物を対象とする図譜の制作に精力を注いだ。



### ■ 石井至毅肖像

大蔵村名主・石井家の出。石井家は旧吉良家臣で喜多見氏とも縁ある元武門の家柄。至毅は父から名主役を受け継ぐも、後年幕臣となり、ついには書物奉行にまで上り詰めた。『世田谷徴故録』など著作も数多い。



### ■ 岡本黄石肖像

幕末の彦根藩家老。徳川四天王の一で、譜代筆頭とも言われた井伊家が官軍側に与することになった際、大きな役割を果たした人物。書家・漢詩人としても名を成した。墓は豪徳寺にある。

美術文芸担当：角和裕子・鈴木 泉

リニューアル記念展示第1弾  
重要文化財保存処理完了記念 **野毛大塚古墳展**  
会期：令和5年8月1日（火）～10月22日（日）

平成30年度から令和4年度にかけて保存処理を行った野毛大塚古墳の出土品を、展示室3の一角を使って展示します。

記念講演会 9月24日（日）13時30分～16時

講師：元世田谷区学芸員 寺田良喜氏  
文化財係学芸研究員 箕浦 絢



予告：リニューアル記念展示第2弾

特別展 **かたち**  
館蔵品でみる **宗教美術の造形** — 仏教美術を中心に —  
会期：令和5年10月28日（土）～12月28日（木）



※事前申込制です。

これからの行事予定

【特別展・企画展・季節展】

重要文化財保存処理完了記念「野毛大塚古墳展」	8月1日（火）～10月22日（日）
特別展「館蔵品で見る 宗教美術の造形—仏教美術を中心に—」	10月28日（土）～12月28日（木）
季節展「ボロ市の歴史」	6年1月13日（土）～1月28日（日）
ミニ展示「すこし昔の暮らし」	6年1月13日（土）～3月31日（日）

【野外歴史教室①】 11月上旬実施予定

【野外歴史教室②】 11月中旬実施予定

【講座】

講座名	実施日	講師
夏休みワークショップ 絵巻物をつくろう！	8月19日（土）	早川 陽（昭和女子大学人間社会学部初等教育学科准教授）
重要文化財保存処理完了記念 「野毛大塚古墳展」 記念講演会	9月24日（日）	寺田良喜（元世田谷区学芸員） 箕浦 絢（文化財係学芸研究員）
特別展記念講演（全2回）	特別展開催期間中	村松哲文（駒澤大学仏教学部教授） 山本聡美（早稲田大学文学学術院教授）共に予定
民俗学講座	12月上旬	松浦瑛士（当館学芸員）
歴史講座「近世文書解読入門」(全4回×2)	6年1月～2月	角和裕子（当館学芸員）
美術史講座（全4回）	6年2月～3月	鈴木 泉（当館学芸研究員）

※詳細は区のおしらせ、およびホームページをご覧ください。

資料館だより No.77

発行年月日 令和5年7月28日

編集発行 世田谷区立郷土資料館

〒154-0017 世田谷区世田谷1-29-18

☎03-3429-4237 FAX 03-3429-4925

広報印刷物登録番号 No.2175